

# 日常を生きる〈痛み〉の先へ ——米軍基地の近傍における「運動」再考——

山本 真知子

## I. はじめに

沖縄の「基地負担軽減」を名目として、太平洋の島々で軍事化が進んでいる。たとえば、2016年12月に米軍北部訓練場（正式名称：ジャングル戦闘訓練センター）の過半の土地が日本側に返還された。それによって、在沖米軍基地が国内の米軍専用施設に占める負担割合は、約74%から70.1%まで減少した一方で、北部訓練場に隣接する人口約140人の東村高江区では、CV-22オスプレイも運用可能な6基のヘリパッド（ヘリコプター離着陸帯）が住宅地を取り囲むようにして新設され、住民は騒音や墜落の不安にさらされている。

また、在沖海兵隊のグアムへの移転が実現すれば、約8000人の海兵隊と約9000人のその家族が沖縄からグアムに移転するということが発表されている。だが、同計画には先住民・チャモロ民族の「聖地」とも呼ばれるリティディアン（Ritidian、チャモロ語でリテクザン（Litekyan）での実弾射撃訓練場（米軍アングダーセン空軍基地内）の建設も含まれており、島の文化や自然の破壊をはじめ、水質汚染や騒音などさらなる軍事化による影響への心配は尽きない。

こうしたなかで、高江とグアムのあいだでは、軍事基地／軍隊の存在および訓練による危機の深刻化に対する新たな抵抗の動きがはじまったのである。2017年6月に、グアムの文化と自然の保全を求める市民団体「プルテヒ・リテクザン（＝リテクザンを守れ、Prutehi Litekyan: Save Ritidian）」のメンバーの一人が高江を訪問し、同年10月には高江の「ヘリパッドいらない」住民の会からも二人の女性たちがグアムを訪れ、「沖縄とグアムでの米軍基地拡大に反対する共同声明」を発表した。そして翌年1月、グアムから沖縄にプルテヒ・リテクザンの三人の女性たちが高江の抗議テントを訪問するなど交流がつづいている。

このように「女性たち」を主語にして運動を説明すると、ジェンダーの視点から基地問題を考えるフェミニズムの運動に連なるものとして位置づけることが可能になるだろう<sup>1</sup>。あるいは、両地域の歴史に目を向ければ、基地／植民地問題

を先住民族の自己決定権の問題として設定してきた運動の系譜のなかでも語りなおせるかもしれない。だが、ここで安易に米軍基地が駐留する地域における問題のある属性を準拠枠として設定してしまえば、基地や軍隊の近傍における日常生活のなかで実践されてきた暴力に対する抵抗の痕跡を覆い隠すことになりかねない。

そこで本研究ノートでは、生きていくうえで重要な関係をつくってきた動きを「運動」として設定したい。基地や軍隊の近傍における日常生活のなかで占領や戦争の痕跡に遭遇することを通して、どんな痛み<sup>2</sup>を抱えてきたのか、そしてそうした体験がどのようにつぎの展開につながってきたのかを考える。今回は、沖縄とグアムそれぞれの地域で生まれ育った二人に対するインタビュー<sup>3</sup>を通して、彼女／彼らが米軍基地や軍隊ととなりあわせの生活のなかで構成されてきた自らの生が、いかに軍事化されてきたのかを見つめなおし、身近な人たちとどのような関係を結んできたのかを追っていく。

## II. 軍事基地／軍隊のある日常を見つめなおす

米軍基地／軍隊を抱える場所には、そこにどんな危険があったとしても、それに慣れないと生きていけない現実がある。いくら気づいていないふりをしていても、墜落やレイプ・殺害事件などが起これば、その身がどんな暴力にさらされているのか否応なしに想像させられることになるのだ。

もう少し具体的に考えるために、2017年10月11日に米軍の大型輸送ヘリコプターCH-53Eが東村高江の民間の牧草地に墜落、炎上したときのことを取り上げたい<sup>4</sup>。その日、米軍機が東村高江区内の小学校校庭上空を何度も旋回していたときに、突然後頭部を手で覆い隠すようにして屈み込んだ子どもがいた。それを見ていたある教員は「落ちてこないから、そんなことしなくていいんだよ」と声をかけたという。だがその後まもなくして、学校から2キロメートル以内の民家地に米軍の大型輸送ヘリコプターCH-53は墜落し炎上したのである。

屈み込む子どもに「落ちてこない」といった教員にとって、訓練しているヘリが落ちるはずはないと思って生活するしかなかったのだろう。また、そこで暮らしている誰もがそうして日々過ごしてきたということでもあるかもしれない。しかし、ヘリは落ちたのだ。すぐさま2004年に沖縄国際大学に同型機が墜落した記憶を呼び戻し、放射能汚染を疑い被ばくを心配したひとは少なくなかっただろう。もしかしたら、1959年にうるま市宮森小学校に米軍のジェット機が墜落し、17人の死者と210人の負傷者を出した事件を思い起こしたひともいたかもしれない。こうしたことからいえるのは、軍事施設／軍隊の存在および訓練がいのちを

危機にさらすものに他ならないということに、本当はヘリが墜落する前から気づいていたということではないだろうか。

多くの場合、運動は特定の場所やひとの被害を根拠として考えられる。だがそれによって、軍事的暴力を感知し、いま目の前に広がっている日常とは違った未来をつくっていく過程としての運動は、外に放り出されてきたのだろう。本章では、基地や軍隊が作動している暴力を感知することを通して、どう運動をつくっていくかということ問いとして据え、二人の経験を通して考えることにする。

### 1. 福地隆之の場合：〈あいだ〉の奥へ分け入る

1983年沖縄県東村出身の福地隆之（仮名）は、2014年以降生まれ育った地域から約20km離れた高江区の小学校で教員をつとめている。福地は中学を卒業するまでの15年間で東村内で過ごし、高校からは隣接する村で寮生活をしながら学校に通い、その後県内の大学に進学。図書館などで働いたのちに、東村の臨時職員として高江区内の学校に配属された。

しかしながら、幼少期から米軍基地のある村で生活してきた一方で、いわゆる基地問題に対しては「他人事だった」という。たとえば、2004年の沖縄国際大学ヘリ墜落事件や、普天間基地問題をテレビで見っていたときに、「あー、そうなんだ」と思うことはあっても、「ほんとに身近なものとは感じなかった」そうだ。ほかにも、米軍の通信基地があったとなりの区が経済的に潤っていたことから、「うらやましいな」とか、「地元にもそんなのがほしいな」とか思っていたという<sup>5</sup>。

そんななか、二十歳のときにあるボランティアに参加し、福地は自らの生活してきた場所のことをいかに知っていなかったか気づきはじめる。彼はボランティアとして、埼玉から来た中学生たちに同行し「ひめゆりの塔」（糸満市）を訪問した。平和教育に疑問をもつようになったのは、そのときに恥ずかしく哀しい思いをしたからだという。

一緒に回っていく中で、むしろ「自分が知ってることを中学生たちに教えてやるぞ」という感じだったのが、「へー」となったんですよ。すごい詳しくて、人数も事細かに覚えてて、「こうこうこうで、自決者が何人いて」……。恥ずかしくなって、哀しくなって、沖縄県の平和教育ってそれでいいのってというのが、そのときにはじまった。<sup>6</sup>

大学卒業後、福地は図書館で働くことになり、暇な時間さえあれば、「沖縄戦」や「移民の問題」に関する本を読んで勉強するようになった。そのなかで、平和教育では「戦前、戦後、復旧の『あいだ』は教えてくれなかった」ことを知り、「そ

のあいだに無残な事件がいっぱいある」ことに気づいたという。その後まもなくして、赴任先が高江に決まる。そして本で読んだことが、そこで実際に起こってきたことを知り、これからまた起こってしまうかもしれない危機感を覚えるようになった。

だが、こうして戦前と戦後のあいだ、あるいは学校で教えられることのなかった記憶があることを自ら学びなおしはじめるずっと前に、「最初のきっかけ」はあったという。それは、福地が小学5年生のときに祖母との間に起きた「慰霊の日」の出来事に遡る。当時、彼は慰霊の日に関する番組を次々に飛ばしながらテレビを見ていた。理由は、どれも「面白くない」ものだったから。だが突然、「換えないで！」という祖母の声が響いた。そして、テレビに映る「白旗の少女」の写真を観ながら、当時その少女の近くにいる、「あの人が出てってくれたから、自分たち助かったんだよ」、「もうだめだよ、こんなして戦争したらだめだよ」と、穏やかな、小さい声で彼女はいったそう。翌年から、彼は慰霊の日に祖母と一緒にテレビを観られなくなってしまふ。「かわいそうなおばあちゃんを見ないといけない」。それに耐えられなかった彼は、「こっそり部屋にこもる」ようになったという。

## 2. ステイシア・ヨシダの場合：家族によるレイシズムから

ステイシア・ヨシダ (Stasia Konomi Yoshida) は、1995年に日本人の母とグアムの先住民民族・チャモロ人の父の間に生まれ、グアムに在住している。2015年以降、グアムの独立や自然・文化の保護運動に継続的にかかわるなかで、自身が経験してきたことの意味を学びなおしてきた。

そもそものきっかけは、大学で履修したグアムの先住民民族・チャモロの歴史や文化に関する授業で、グアムの独立を目指す市民団体「インディペンデント・グアハン (=グアハンに独立を、Independent Guahan)」の定例会議に参加すれば、課外単位が取れたから。だがその後も参加しつづけ、2017年以降はプルテヒ・リテクザンでも活動している。

ヨシダにとって「運動する」ということの意味を考えるうえで切り離せないのが、家族との関係である。ヨシダの両親は、彼女が幼いころに離婚し母に引き取られている。その後、母は別のチャモロのひとと再婚したが、ヨシダによると、チャモロ側の親族はいずれも「アメリカ化している」という。

ヨシダが「アメリカ化」といったのは、親族に米軍関係者が少なくないということと無関係ではない。彼女によると、軍隊好き (pro-military) な立場の実父方の祖父を筆頭に米軍の高官を含め、軍関係の仕事をしているひとは複数名いる。彼女は日本人との混血児であることを理由に、親戚によってからかわれたりいじ

められたりしてきた。その理由として、彼女は自分が「アジア人のような顔立ちをしていた」ことを挙げる。たとえば、彼女が親戚の人たちとドライブしていたときに、一緒にいたひとの一人が観光客を指さして、「見て、あそこにあんたのいところがあるじゃない？」と彼女に向けていったこともあったという。当時を振り返りながら、ヨシダは自らが人種化されてきた体験をつぎのように話している。

いまなら、レイシズムだってわかる。(中略) どうしてかというと、私は日本人でもあり、チャモロ人でもある。でも、そのせいでもらわれて……。なのに、私は日本語もチャモロ語も話せない。白人ではないのに、英語を話している。成長してわかるようになったのは、どんなことも単純化されているけれど、そこで生きるのは決して簡単ではないということでした。<sup>7</sup>

日本人とチャモロ人の「混血児」であることを理由に自らが人種化されていく状況において、彼女は自分自身もまたアメリカ化していることに気づきはじめていた。カフェで話を聞いていたときに、ヨシダが「私は植民地化の産物だから」とささやくように、しかしはっきりとした口調で告げたことも、彼女が自分をどう見ているのかということ伝えていたのかもしれない<sup>8</sup>。

### 3. 二人の体験から：反復的行為が日常を変えるとき

ここまで米軍基地の近傍で暮らしてきた二人の体験を通して、自らの生が戦争体験や軍事化を支える人種差別のすぐ傍にあったということに、どのように気づいてきたのかをみてきた。以下ではその気づきが、それまで安定的に維持されてきた日常的秩序を揺るがし、脱軍事化運動へと向かう契機になるかもしれない可能性を検討してみたい。

エドワード・サイードは、日常を日常たらしめてきた要因を、反復的行為の遂行性ではなく、何を／どのように反復するのが問われないうまま、反復という行為が自己目的化されてきたことに見出していた<sup>9</sup>。これは視点を変えてみれば、それまでの日常を内側から変えうる展開が始まるとき、そこには新たな行為の反復が生まれているということかもしれない。

たとえば福地は、祖母が放った「換えないで！」という一言や、沖縄戦の体験を話すときに彼女が見せた「かわいそうな」姿を、間違いなく痛みとして記憶していたはずなのだ。だからこそ、彼がその姿を見ないですむようにするために部屋にこもっていたのであり、繰り返し祖母の戦争体験を想像する彼のうちには、新たな痛みが生じていたに違いないのである。また、ヨシダは家族から向けられてきた人種差別的な意味を含む言葉によって、嫌な思いをしてきたし、何よりも

傷ついていた。だが、日本人との混血児であるという理由でそのような目に遭わなくてはならなかった体験を通して、彼女は自分自身に目を向けはじめ、自らもまたアメリカ化の過程のなかに組み込まれてきたことに気づきはじめていたのである。こうした二人の経験からは、出来事を繰り返し想起しそれを自分のなかで咀嚼していく過程において、日常のなかでそれまでは気づくことのなかった痛みから発見されうる関係性があるということが浮かび上がってくるのではないだろうか。

詳しくは後述するが、ここで重要なのは、「痛み」とは何なのかを定義したり説明したりすることではない。そうではなく、痛みとしかいいようのないことが話されるということと、それを聞くということにある。なぜなら、語られているのは、どう説明していいかわからない経験であり、正面から語ることのできないような経験も含まれているからである。

要するに、体験そのものがどのようなものだったかということではなく、体験が反復的行為を介してどう読み替えられつづけていくかが問われるようになってはじめて可能になるコミュニケーションが存在するというのではないだろうか。こう言及する際に念頭にあるのは、現象学的社会学において、「日常」は「端的な所与」としてある以上、それは「さらなる気づきが生じるまでは問題化されることがない」と解釈されてきたことだ<sup>10</sup>。こうした議論では、他者との関係性がめつたに動くことのない前提として説明されている。だがそれによって、気づきを介してはじまる〈反復〉——内省的に問いを連ねながら、言語化と行為化を積み重ねていく過程——のなかで、関係性の変容とともに日常そのものが更新されていくという可能性は、捉え損なわれてきたのではないだろうか。

これを踏まえた上で福地とヨシダの経験を考えると、周囲の誰かとの関係性に生じた亀裂の前で立ち止まるときに、自らの生を捉えなおし脱軍事化しようとする——つまり、日常を所与の現実としてではなく、可変的なものとして認識する——契機が生まれうるということも把握できるはずだ。

### Ⅲ. 〈痛み〉から言葉を紡ぎ出す

本章では、日々の生活のなかで直面する痛みはどう向き合い、納得したり了解したりしながら行動してきたのかを明らかにしていく。それは、痛みが一定の場所に留まるのでもなければ、誰かの所有物でもないことを自らの身体を媒介して知る過程でもある。次節より、〈痛み〉を抱え込んだ身体が、米軍基地や軍隊の近傍においてさらされている危険をなんとかして回避し、ともに生き延びていくための模索へと向かう過程を検討する。

## 1. 福地隆之の場合：「伝わらない」から考える

福地は現在、高江に通うようになって5年目。日々生活するようになってはじめて、「見たことない、不思議なものが飛んでいる恐怖」を知ったという。そこには、上空を飛ぶ米軍機の騒音からいつ墜落するかわからない不安だけでなく、米兵の掛け声が聞こえるほど至近距離で実施される軍事訓練と常にとりあわせの日常、さらにはそれまでなかった頭痛やアレルギー症状などがあらわれはじめた。

こうした高江で経験したことについて、福地は友人たちに話すようになった。しかし返ってくるのは、「あー」という心ない反応だったという。また、村外に住んでいる高校や大学の同級生を地元に来てきたこともあった。だが、彼らは「海がきれい、星がきれい、自然がスゴイ」と感動しても、そのうち「何もない」「見るものなくなった」と落胆して帰っていった。そんなことがつづいたのちに、福地は話すことをやめ、「聞く」だけになっていったという。だが、こうした状況において、福地は自らが基地／軍隊という存在とその実践によってさらされつづけている危機について考えつづけ、基地問題は「他人事じゃない」ことに気づきはじめる。それによって、「高江の人は、どう思っているのか」を考えたり、ひととかかわりはじめたりしたのである。

たとえば、私が福地とはじめて話をしたのは、2017年にある高江の住民の方の呼びかけで開かれた忘年会に参加したときのことである。鍋料理や酒をすすめながら世間話をしていたときに、平和教育の話題になった。身の周りにある米軍基地／軍隊の存在や訓練など、いまここで起こっていることについて授業で取り上げることはあるか尋ねてみた。反応は薄かったと記憶しているが、後日、福地が翌年6月に授業参観で実施した平和教育の内容が評判になっていると高江の知り合いから聞き、再び会って話を聞かせてもらうことにした。そこで彼は、忘年会のときに私にいわれた「いま起こっていること」に触れようとしない平和教育のあり方が「ずっと気になっていた」と教えてくれた。

授業参観では、慰霊の日について取り上げ、概略を説明した後に自身が小学5年生だったときの慰霊の日のエピソード（前章参照）を聞かせた。すると、「慰霊の日のことを話し出した瞬間から、子どもたちの目が変わって」きたという。そこで予定していなかったが、「『戦争』・『平和』から連想するものをどんどん書いていこうね」と呼びかけみたところ、子どもたちが次々と言葉を発表しはじめた。



る人たちと一緒にそこに参加していたと他の家族に伝えたことがあった。その後、父方の祖父から一本の電話があり、「会って話したい」と言われた。彼女は彼のところに行ってみると、彼は「どうしてこんなひとたちとつるんでいるんだ?」といい、さらには過去に世間を騒がせた運動関係の事件や噂を引き合いに、彼女の活動に対して批判しはじめたという。

運動することが困難であるもう一つの理由は、「世界は暴力にあふれている」ことを知ってしまうことと関係している。だが、それが「重要なのはわかっている、打ちのめされるし落ち込んでしまう」という。たとえば2017年1月、市民団体・プルテヒ・リテクザンの他の二人のメンバーと一緒に沖縄を訪問したときのことは、彼女にとってトラウマ的な出来事になっていた。彼女たちは、辺野古の米軍基地ゲート前に行き、座り込みによる抗議行動に参加した。そこで彼女が目撃したのは、自分の祖父母と変わらない年齢層の人たちが警察によって次々と両腕両足を抱え上げられ、強制排除されていくという衝撃的な光景であった。そのときのことを振り返りながら、彼女はこう語った。

これ（＝沖縄で基地ゲート前に座り込む人々を警察が強制排除していく状況）は、本当にトラウマになるようなことだったんです。そのせいで、あのときのことや、彼女／彼らがいまも座り込みつづけているということをしよっちゅう考えてしまうのだと思います。私がこうして（沖縄のことを）考えているのは、いつか私たちもそうしなくてはならなくなる時がくるかもしれないからでもあります。<sup>11</sup>

沖縄にいたときに、彼女はそこで起こっていたことをグアムでも起こるかもしれないこととして想像したり、グアムと沖縄の両方に作動する暴力を感知したりしていただけない。グアムでの日々の生活に戻ったあとも、繰り返し沖縄で目撃した状況をあたかもそこにいるかのように想像していた。つまり、別の場所に移っても、沖縄の座り込みの現場で体験した痛みを自らの身体のうちで反復的に感じ取っていたのだ。

これに加え、彼女には沖縄の基地ゲート前で座り込みをしていた人たちが、どうしても自分の祖父母と重なって見えてしまったのである。

私には、年を取った私の祖父母が強制排除されていくのをありありと想像できます。<sup>12</sup>

沖縄の基地ゲート前で彼女は運動にかかわることに対して批判的な家族が、自ら

の存在をかけて座り込みはじめるかもしれないということ、そしてそのときに彼女／彼らは警察によって強制排除され、その意思を踏みにじられるかもしれないということ、ヨシダは想像していたのである。

### 3. 二人の経験から見えるもの：インタビューという場

本章では、二人が自ら体験してきた痛みがある特定の身体のうち留められるのではなく、どのように共同的な過程へと向かってきたのかを素描してみた。注目したいのは、インタビューにおいてそれがどのように実践されていたのかということである。以下において、このインタビューの場において語る／聞くという関係が、痛みとどのような関係を結んでいるのかということについて考えてみよう。

まず、福地へのインタビューを通してわかったのは、彼が自分の体験を伝え、ともに考えるための言葉を探す挑戦をしてきた過程に、私自身も含まれていたということだった。以前彼と交わした会話が彼のなかに問いとして抱え込まれてきたということは、約1年後にインタビューしたときにはじめてわかった。それは、インタビューする側／される側という関係性でありながらも、話の途中からは彼の祖母が抱えていた沖縄戦の記憶との接触を通して彼が抱えつづけてきた痛み、私自身（の言葉）もまた連なっていたように思われた。また、ヨシダへのインタビューでは、運動体の成員としての活動に関する質問への応答として、彼女がなぜ家族の話を深く掘り下げようとしていたのか理解することができなかった。だが、家族との関係が運動するうえで不可避であり、家族との関係を変えようとすることも運動の一部として経験してきたことを伝えようとしていたのかもしれない。真偽のほどは別にして、私の表情を何うような視線を送ったり理解を求める言葉を投げたりして私の反応を何度も確認していたことを思い出すと、それが彼女にとってどれだけ大事なことだったのか少しわかった気がしてくる。

しかしながら、自分の経験を運動の場面に直結するものでもなければ、直結させられたくもない場合もあるだろう。そうしたときに、話さないあるいは話せない、ということが起こりうる。そうしたときに、〈ただ聞く〉ということが、話せない／話したくない経験が閉じ込められていく状況を変える契機になるかもしれない。さらにいえば、聞くことから始まるコミュニケーションとは、何かをいいとか悪いとか判断する前に「聞く」という行為を置くということなのではないだろうか——ここで考えようとしているのは、関係性をつくっていく契機としてのインタビューである。そしてそれは、痛みが固定化した前提のもとで語られるのとは異なる展開へと向かっていく可能性として見出されるのではないだろうか。

だが、「痛み」と一言でいっても、それは一人ひとり違う。そして、それぞれ違うものとして体験された痛みは、言語化されていくなかでそのズレが浮き彫りにされることもあるだろう。別の言葉でいえば、それはともにどう生きるかを問うための新たなコミュニケーションをつくっていくための過程でもあるだろう。こうした痛みを言葉にする過程で生まれるコミュニケーションを、EJ・ゴンザレス＝ポレドは「痛みの風景 (painscapes)」と名付け、「アクターたちの状況性によって（見え方が）変わる遠近法の構成物」を描き出すことの重要性を指摘した<sup>13</sup>。一人ひとりがどんな風景を見ていたのかがわかるようになれば、新たな間いを見つけることにもつながるかもしれない。

再び二人の話に戻せば、インタビューで聞くという行為は、単に情報を仕入れるというだけでなく、軍事的暴力にかかわる痛みにならされざるをえないことが顔を出す窓口にもなりうることを確認できるのではないだろうか。つまり、インタビューする／される関係は、痛みと連なりともに言葉を獲得していく開かれた場をつくり出していく過程と決して無関係ではないはずなのである。

#### IV. おわりに

米軍基地／軍隊が当たり前のように存在する場所において、いのちがさらされている危機を回避しともに生き延びていくために必要な関係性を築いていく過程を追ってきた。福地とヨシダの経験からは、身近な家族とのコミュニケーションを通して感じ取っていた痛みが、既存の関係を脱臼させ新たな関係性の模索へと接続されてきたことが明らかになってきたと思われる。これはつまり、複数性のなかで思考することによって切り開かれうる関係性があるということではないだろうか。

既存の組織を基盤とした運動の傍流において形成されてきた運動とは、こうした一人ひとりの日常生活に深く根差した関係性をどう未来に向けて更新していくかという問いをめぐる地道な闘いだったのである。冒頭でも触れたことだが、基地の島・沖縄とグアムの運動を考えると、共通項をもつことを前提とした運動以外にも、日々周りの人たちとの関係性において運動がつくられてきたということを、ここで重ねて想起しておきたい。

## 註

- 1 たとえば、秋林こずえによる論文「ジェンダーの視点から考える在沖縄米軍基地」(2012)は、主に女性たちによるグループが米軍が駐留するホスト地域において、どのようにネットワークを形成してきたのかを明らかにするものである。秋林は、1997年に発足した「軍事主義を許さない国際女性ネットワーク」において、太平洋諸島の女性たちが「ジェンダー平等の達成による脱軍事化と脱植民地化」を目指して連帯してきたことを明らかにしている。  
秋林こずえ「ジェンダーの視点から考える在沖縄米軍基地」『国際女性：年報』26(2012)：106-109.
- 2 本ノートでは、痛みの表記の仕方を①山括弧、②鍵括弧、③括弧なしの三種類に区別している。①の〈痛み〉は、複数の痛みを含んだものとして、②の「痛み」は文中で強調するため、③の痛みは、個別具体的なものに対して使いわけたつもりである。
- 3 具体的な研究方法としては、セミストラクチャード・インタビューを採用した。主な質問は、以下の五つに大別される。(1) いつ／なぜ／どのように、米軍基地の近傍で生活していることを意識しはじめたのか。(2) 家族や親戚から戦争体験を聞いてきたか。ある場合は、それはどのような内容か。ない場合は、それはなぜか。(3) どのような活動を通して、「戦争」を学びなおしてきたのか。(4) どのような活動を通して、基地問題に取り組んできたのか。(5) (3)と(4)で挙げられた活動において、どのような問題に直面してきたか。また、それに対してどのように取り組んできたか。これらの問いに対する応答を引き出すために、1時間半から2時間程度、インタビューーからの発話を受けて問いを投げるというやりとりを繰り返した。
- 4 以下で取り上げるエピソードは、福地の体験(2018年12月28日に実施したインタビューより)に基づいている。
- 5 インタビュー(2018年12月28日、東村にて実施)より。
- 6 同上。
- 7 インタビュー(2019年2月19日、タムニンにて実施)より。英語で実施。日本語訳は筆者による。
- 8 アメリカ化や植民地化について考えるにあたって注意しなければならないのは、それが1941～1943年の日本軍による占領期に残虐行為を受けつづけてきたグアムに人々に嫌悪感をもたらし、アメリカ合衆国による解放を希求するようになっていったことからわかるように、日本の侵略や占領の記憶と切り離せないということが挙げられる。  
Camacho, Keith L., *Cultures of Commemoration: The Politics of War, Memory, and History in the Mariana Islands*, (Honolulu: University of Hawaii Press, 2011), 西村明・町泰樹訳、『戦禍を記念する——グアム・サイパンの歴史と記憶』(岩波書店, 2016)：64.
- 9 Said, Edward W., *After the Last Sky*, (New York: Random House, 1986), 島弘之訳、『パレスチナとは何か』(岩波書店, 1995：76)。
- 10 Schutz, Alfred & Luckmann, Thomas, *Structures of the Life-World*, (Illinois: Northwestern University Press, 1973), 那須壽監訳、『生活世界の構造』(筑摩書房, 2015)：44.
- 11 インタビュー(2019年2月19日、タムニンにて実施)より。英語で実施。日本語訳は筆者による。
- 12 同上。
- 13 Gonzalez-Polledo, EJ, Painscapes, In *Painscapes: Communicating Pain*, eds. Gonzalez-Polledo, EJ and Jen Tarr, (London: Macmillan Publishers, 2018)：11.

**Abstract**

## Beyond Daily Painful Living: Rethinking “Activism” Near US Military Bases

Military proliferation has been increasing on the Pacific Islands through international initiations launched by the governments of USA and Japan as an alternative to the burdensome hosting of US military bases in Okinawa. This has caused the residents of Takae, Higashi Village in Okinawa and Guam to create collective protest movements in defiance of the unrelenting military expansion. These protest movements for demilitarization have been analyzed using the lens of historiography of activism for women's rights and indigenous peoples. Considering the complexity of the framework which is being used to study this issue, there is great difficulty in clarifying the realization of one's exposure to daily violence in the face of a militarized reality, which is further compounded by the countermeasures attempted. In light of these circumstances, this paper aims to dissect the essential process of relationship creation within a setting of constant mortality and collective survival. By employing the methodology of interviewing two key figures living in Okinawa and Guam, the recording and subsequent analysis of the fear and pain that have been experienced through living in the vicinity of the military bases will be conveyed, as well as the impact of the transfer of such sentiments onto those who share habitation with the afflicted.

